人間発達文化学類　福島震災学校支援プロジェクト

までいの力で<学力・教育・文化>再生を！

<呼びかけ>

この度の東日本大震災で被災された皆様、心からお見舞い申し上げます。

まだ沢山の課題が残る日々ではありますが、このような時だからこそ、福島の未来を創る子どもたちの成長を守り支えることは新しい福島の創造に繋がる、見逃すことができない大切な課題となります。

この期に、福島大学人間発達文化学類は、福島の宝となる子どもの成長を応援するため、震災学校支援プロジェクトの一環として「までいの力」で学力・教育・文化の再生を進め、<学習・心のケア支援活動>を展開いたします。「までい」とは「真手」と書くという説もあり、「丁寧に心をこめて」という意味を持ち、これまでの生産効率やその速さを求め続けてきた経済至上主義社会に対する警鐘の意味が込められています。「計画的避難地区」に指定された飯舘村は、平成の市町村合併に際し、「土と農・畜産」に生きる道を住民の総意として選択し「スローライフ」宣言を行い、「までいの力」*で地域の智恵とエネルギーと生産とを循環させる循環型社会の創造を意図していました。これまでの人間・社会関係を問いなおし環境問題に配慮し人生の豊かさを「までいに（丁寧に）」見つめ歩み直そうとするこの視点は、「東北・福島」の生き方の原点に通じ、福島の新しい未来とその地域創造において学ぶべき重要な位置をしめると思われます。原発震災による「原発疎開」を余儀なくされ、生まれ育った「故郷」を次世代に継承することが困難に見える今こそ、福島のこれまでの文化と歴史を再確認し東北・福島の社会構造を明らかにし、それを福島の未来創造の「糧」として継承することが必要です。その歩みこそが、誇りを持って「2011.3.11.Fukushima」の名前を新たに世界の歴史に刻むことを可能とさせるはずです。

人間発達文化学類は、前身となる教育学部時代からの歴史と伝統を継承しつつ、今日、福島の学校・教育・文化との対話を進めその再生と創造に努め、子どもたちの未来づくりを応援します。

（＊　飯舘村監修『までいの力』SEEDS出版，2011年）

<人間発達文化学類　福島震災学校支援プロジェクト>

Ⅰ．福島大学等での教員を中心とする各種ボランティア活動

1．大学体育館の避難者支援活動として，協力教員を中心に体育館内で学習・遊び支援活動を開始。
2．人間発達文化学類教員により，体育館避難者の食事を支援するクッキングボランティアを実施。
3．大学図書館復旧支援，避難物資搬入支援活動他
4．各教員自主的活動展開

Ⅱ．人間発達文化学類学生ボランティア活動の展開

1．事前準備：福島県教育委員会と被災した児童・生徒の学習・遊び支援活動の必要性について確認を行うとともに，転入が多かった福島市教育委員会・郡山市教育委員会等と相談を行い具体的な活動内容について確認した。具体的には，被災した児童・生徒の転入を多く受け入れた福島市立佐原小学校・荒井小学校・松陵中学校等に連絡をして活動計画を立て，当面は，避難所を中心として学習支援活動を展開することとした。学校側が一斉登下校を行っている関係上，学校の校舎での活動の展開は困難であった。学校に学習支援活動についての案内文を届け，子どもの保護者に連絡するとともに説明会を開催しながら，また，避難場所となっているホテル等に協力を求めながら活動を展開している。

2．後援教育委員会：福島県教育委員会・福島市教育委員会（後援），郡山市教育委員会（後援申請中）

III．人間発達文化学類学生ボランティア活動の内容

大学における学生に対する実家等への避難指示が解除されることを待って対応を進め，４月の最終週から開始し５月の連休をはさみ実施し継続中である。基本的には，協力教員がそれぞれ 4~5 名の学生を自家用車でつれて各避難所に行き、小学生・中学生の学習支援を展開している。参加した学生には，参加記録（感想等）を提出すること求め，子どもや教育に関する見方やとらえ方を深め卒業研究等につながるよう工夫している。

1．学習支援ボランティア

(1)あづま運動公園体育館	火・金	16:30～18:00
(2)郡山養護学校	月・木	16:00~18:00　19:15～20:30　（５月で避難所終了）
(3)ビックパレットふくしま	月・木	20:00～21:50　→　６月予定：遊び支援等を中心に
(4)土湯温泉ホテル	月・木	16:30~18:00
(5)飯坂温泉　叶や	月・木	16:30～18:00　等

事前にパルセ飯坂や飯坂小学校と相談を行う他，飯坂小学校で学習支援に関するニーズ調査を行い，飯坂温泉ホテル街に避難している保護者の要望等を確認した。具体的な活動場所等の選定し開始。

2．遊び支援ボランティア

(1) あづま総合運動公園　月２回の土曜日　13:30~15:30

(2) 磐梯熱海温泉　華の湯　月２回の土曜日　13:30~15:30

担当教員が 10 名程度の学生を連れて各避難所に行き、工作や昔遊びを行う。

3．心のケア支援ボランティア

(1) あづま運動公園体育館で保護者を対象に震災後の「子どもの心のケア」への対応について情報提供。

4．学類教育カリキュラムとの連携によるプログラム

(1) 当学類のカリキュラムとして開設されている「自然体験実習」では，夏休みに児童・生徒をキャンプに連れて行き自然体験学習を展開することを通して子どもや教育について学ぶ授業がある。平成 23 年度は，被災された児童・生徒を招待参加とする計画として展開するため，関連教育委員会やこの趣旨に賛同する研究者・研究団体と連携して準備を進めている。

(2) 当学類のカリキュラムの中に開設されている授業科目「臨床教育実践」の実施にあたり，佐原小学校を実践小学校として設定し小学校との連携を進めた。

4．学生ボランティア募集と学生指導等

(1) 福島大学及び学類のホームページにより学生ボランティアの募集を４月末から５月初めにかけて実施し，120 人程度の学生が登録を行った。

(2) 学習支援ボランティア説明会(5/6)を実施し，避難所の状況説明・ボランティア活動の意義・子どもの心のケアに関する配慮等について事前指導を実施した。

(3) ボランティア活動に参加する際の注意を与えるとともに，学生保険等への加入を指示した。

(4) 簡単ではあるがボランティアに関する注意事項をまとめ学生に配布した。

(5) 学生のネームプレートを作成し，ボランティアに参加する際には着けるように指示している。

(6) 学習会等に参加する児童・生徒の名簿表を作成し記入を求め余震対応に備えている。

(7) 参加学生への支援の一環として学生交流会を実施し経験と学んだことを交流させる(5/25)

5．学生ボランティア活動の基盤整備と課題

(1) 後援会と教員親睦会からの経済的支援を基に学生ボランティアとで活動を展開中。

(2) 対象地区が広域にわたる移動手段の確保が必要である。現時点では協力教員の自家用車と引率対応により活動を展開している。授業や大学運営・学類運営に必要な委員会活動等との調整にも課題がある。

福島大学 わくわく学習会だより

5/12

なんか、すごくまじめ。

用意されたスペースはもうぎっしり。

ビックパレットふくしまのボランティアに参加してみて，初日の活動でみんな来てくれるか不安でしたが予定の時間になると勉強ルームはいっぱいになりました。

参加していた子ども達は学校で出された宿題に一生懸命取り組んでいました。中には小学校中学年の子も自ら勉強したいと参加してくれて，ビックパレットの子ども達は勉強熱心な子どもが多いと思いました。

私自身，初日に参加しもっと勉強を教えられるようになりたいと思いました。勉強が終わった後に少しお話することもできました。勉強をサポートすることが私の活動ですが，子ども達のお話にも耳を傾け，コミュニケーションも大事にとっていきたいです。

勉強が終わって、ちょっとおしゃべり。

学生も負けずに勉強しなくっちゃ……

5月9日から、福島大学人間発達文化学類の教員をめざす学生たちによる学習支援ボランティアが始まりました！

勉強が好きな子も、勉強が嫌いな子も、学生たちと週2回だけでも、学習会に参加しませんか！

みんなで楽しく勉強しよう！

佐原・荒井小学校&あづま運動公園・土湯温泉ホテル等配付資料

平成23年５月17日

保護者の皆様

福島大学人間発達文化学類

福島大学人間発達文化学類　福島震災学校支援プロジェクト（ご案内）
までいの力で<学力・教育・文化>再生を！

この度の東日本大震災で被災された皆様、心からお見舞い申し上げます。

まだ沢山の課題が残る日々ではありますが、このような時だからこそ、福島の未来を創る子どもたちの成長を守り支えることは新しい福島の創造に繋がる、見逃すことができない大切な課題となります。

この度、福島大学人間発達文化学類は、福島の宝となる子どもの成長を応援するため、震災学校支援プロジェクトの一環として「までいの力」で学力・教育・文化の再生を進め、<学習・心のケア支援活動>を展開いたします。「までい」とは「真手」と書くという説もあり、「丁寧に心をこめて」という意味を持ち、これまでの生産効率やその速さを求め続けてきた経済至上主義社会に対する警鐘の意味が込められています。「計画的避難地区」に指定された飯舘村は、平成の市町村合併に際し、「土と農・畜産」に生きる道を住民の総意として選択し「スローライフ」宣言を行い、「までいの力」*で地域の智恵とエネルギーと生産とを循環させる循環型社会の創造を意図していました。これまでの人間・社会関係を問いなおし環境問題に配慮し人生の豊かさを「までいに（丁寧に）」見つめ歩み直そうとするこの視点は、「東北・福島」の生き方の原点に通じ、福島の新しい未来とその地域創造において学ぶべき重要な位置をしめると思われます。原発震災による「原発疎開」を余儀なくされ、生まれ育った「故郷」を次世代に継承することが困難に見える今こそ、福島のこれまでの文化と歴史を再確認し東北・福島の社会構造を明らかにし、それを福島の未来創造の「糧」として継承することが必要です。その歩みこそが、誇りを持って「2011. 3. 11. Fukushima」の名前を新たに世界の歴史に刻むことを可能とさせるはずです。

人間発達文化学類は、前身となる教育学部時代からの歴史と伝統を継承しつつ、今日、福島の学校・教育・文化との対話を進めその再生と創造にあたり、子どもたちの未来づくりを応援します。

（＊　飯舘村監修『までいの力』SEEDS出版，2011年）

詳細は下記の要領をご覧ください。

記

1．事業概要：福島大学人間発達文化学類　震災学校支援プロジェクト
　　テーマ：学習・心のケア支援活動「までいの力で<学力・教育・文化>再生を！」

2．事業名称：「わくわく学習会　～　福大生のお兄さんとお姉さんといっしょ！」
　＊あづま運動公園体育館・郡山市ビッグパレット・福島県郡山養護学校・土湯温泉街等で活動展開中

3．後　　援：福島県教育委員会（申請済）、福島市・郡山市教育委員会（申請中）

4．主な内容：主として小・中学生等の学習支援および心のケア支援活動

5．対　　象：主として東日本大震災により避難され学習支援を希望する児童・生徒

6．今後の予定：週に数回の定期的な学習等の支援活動を拠点となる避難場所等で展開

7．問合せ先：福島大学人間発達文化学類支援室（Tel. 024-548-8101）

2011年5月17日

福島大学人間発達文化学類 震災学校支援プロジェクト
学習・心のケア支援活動 in 土湯
「までいの力で＜学力・教育・文化＞再生を！」

福島大学人間発達文化学類は、前身となる教育学部時代からの歴史と伝統を継承しつつ、東日本大震災を踏まえ、あらためて福島の学校・教育・文化との対話を基盤にその再生と創造をめざし子どもたちの未来づくりを応援します。ここに学習支援ボランティア活動を展開しますので、希望される方はご自由に参加ください。

1. 事業名称：わくわく学習会 ～福大生のお兄さんとお姉さんといっしょ！

2. 主　催：福島大学人間発達文化学類

後　援：福島県教育委員会(申請済)、福島市・郡山市教育委員会(申請中)

3. 内　容：主として小・中学生等の学習支援活動

4. 対　象：東日本大震災により

学習支援等を希望される児童・生徒の皆さん(参加自由)

5. 場　所：土湯温泉 土湯温泉ホテル (電話:024-595-2111)

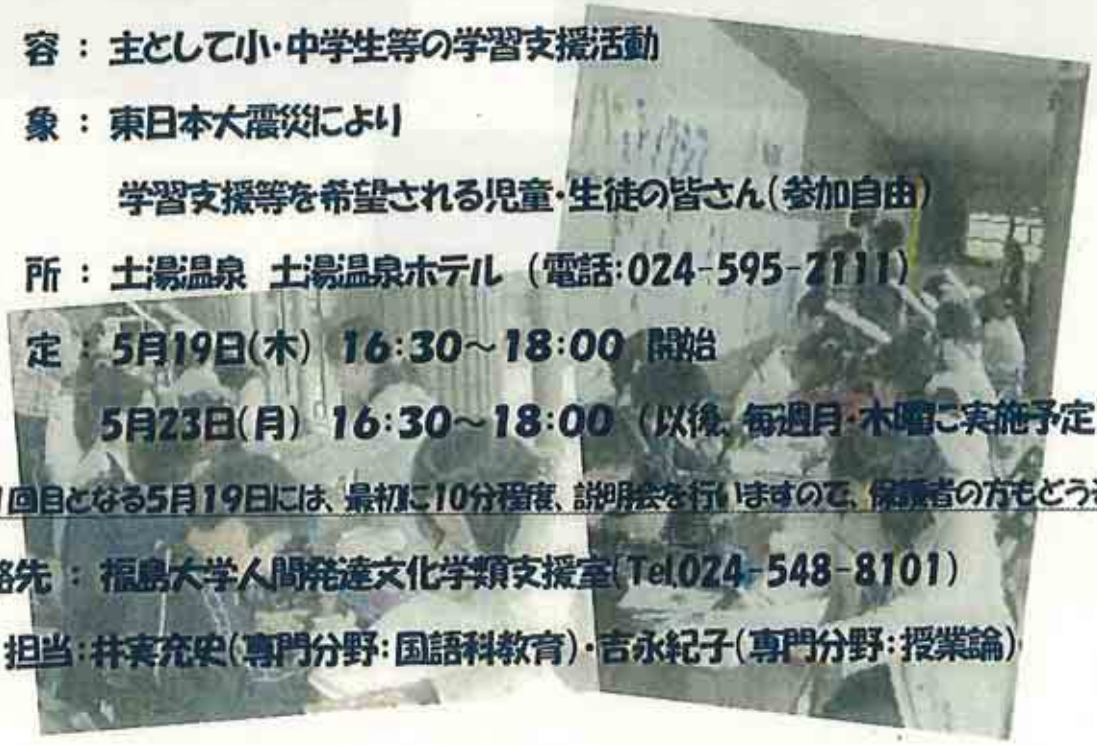
6. 予　定：5月19日(木) 16:30～18:00 開始

5月23日(月) 16:30～18:00 (以後、毎週月・木曜に実施予定)

※第1回目となる5月19日には、最初に10分程度、説明会を行いますので、保護者の方もどうぞ

7. 連絡先：福島大学人間発達文化学類支援室(Tel.024-548-8101)

担当:井実充史(専門分野:国語科教育)・吉永紀子(専門分野:授業論)



事例：土湯温泉ホテル活動報告

学習支援ボランティア in 土湯地区（@土湯温泉ホテル）

第1回（2011.5.19.Thu.）　引率教員：吉永紀子

【活動の概要】

16時　土湯温泉ホテル到着　会場（客室411）セッティング　準備
16時15分ころ～　保護者への説明（五月雨式に、ある程度集まられたところから随時）
16時30分～18時　学習支援
18時10分　片づけ、撤収

【写真】会場の様子

【準備していったもの】
・会場の入り口用のポスター、セロテープ
・A４判の白い紙（20枚程度）・・・説明用、ノートのない子ども用など
・預かっていた絵葉書・・・おみやげとして
・色鉛筆（福大体育館が避難所になっていたときに使われていたもの）
・子どもたちが記入する来室者名簿
・（念のため）予備の筆記用具
・（念のため）「夏の友」（小１～小６用）・・・今回はそのまま持ち帰った。手ぶらで来た子どもや、宿題が終わって持て余している子どもがいたことを想定して持参したが、これは今後は不要かもしれない。学生が白い紙に問題をつくって書いたり、子どもに問題づくりをさせたりして、これがなくても宿題をしたあとに学習を続ける子どもたちもいた。

★学生には、子どもたちがもし筆記用具がない場合、紛失や持ち帰りなどがあってもまずいかと思い、近くの友達に借りてもらうなどして、自分のものをできるだけ供出しないように伝えた。忘れた子どもがいても、すぐ近くに居住スペースの部屋があるため、あとからいろいろともの（教科書やノート、問題集など）を取りに行く子どももいた。

【参加学生】　計４名（女性２名、男性２名）
教育探究クラス４年　加藤みゆき
教育探究クラス４年　名取絵里花
学習支援クラス４年　横山雄大
人間発達文化研究科２年（スポーツ健康科学領域）　石塚健多

【参加児童・生徒】　計11名（小学生６名、中学１年生６名）（男子５名、女子６名）
・・・氏名一覧は別紙のとおり

【参加学生による活動報告ならびに感想（原文ママ）】
○Ｋ．Ｍさん
木曜の土湯でのボランティアに参加した加藤みゆきです。
土湯は、あづまと違って各家族で個室があるということでプライバシーがある程度守られているせいか、子どもたちも落ち着いているような印象をもちました。
宿題が終わってしまった子ども(T君)への支援としては、同じような問題を作ってやらせてみました。
あづまではうまくいかなかったため、はじめは「やらない」と言われるのではないかと不安があったのですが、とても意欲的に取り組んでいました。また、途中で今日は○問まで!という目標をもたせたことで、見通しがたち、最後まで意欲が継続していたのかと思います。宿題が終わっている子どもに対しての支援をどうするかを戸惑わないようにある程度考えておく必要があると思いました。
また、T君のお姉ちゃんのＳちゃんに学校で分からなかった問題を教えることになりました。はじめは「やるの嫌だな～」という表情をしていたのですが、一緒に考えていくなかで徐々にやり方のコツをつかみ、問題が解けるようになりました。その時のＳちゃんのうれしそうな顔

を見たとき、私自身もとてもうれしくなりました。

それから、2 回のボランティアを通じて子どもたちは元気で明るいと感じていました。ですが、途中でT君にじんましんが出て、お父さんから「疲れやストレスからきている」という病院での診察を聞き、やはり表に見えていないけれど子どもたちも内面に抱えているものがあるのだということをとても実感させられました。

今後も支援にあたっていく中で、試行錯誤しながらも子どもたちとの関わり方、距離のおき方を考えていきたいと思います。

来週も参加したいと思っています。よろしくお願いいたします。

○N．Aさん

私は、Kちゃんという６年生の女の子とMちゃんという３年生の女の子の学習支援をしました。学年は異なる２人ですが、算数の計算問題と漢字練習が宿題でした。Kちゃんに聞いたところ漢字練習は毎日宿題だそうです。

今日私が関わった２人の女の子はとてもおとなしい子でした。黙々と宿題に取り組み、ほとんどつまずくことなく、宿題をやり終えてしまいました。真剣に考えている姿を見て声を掛けることができず、計算ミスを発見した時くらいしか声を掛けることができませんでした。宿題が全て終わってしまうと、他の問題を出すのには気が引け、学校の話、兄弟の話を探り探りで持ちかけました。質問するのにも「これを聞いたらけないんじゃないか？」など、余計なことを色々考えているうちに、話せなくなってしまいました。そこに、前の学校の先生が間に入ってくださって、宿題の丸付けをすることになり、間違えた問題を一緒に考えたことで、少しではありあしたが、一問一答だった会話から変化があった気がします。

会話が続かないととても焦ります。でも、他の中学生が楽しそうに話しているのを聞いたり、沈黙があっても良いんじゃないかと強く感じました。会話をつなぐだけにただ自分が話すばかりでなく、答えてくれたことを大切にして話ができるようにしたいと思いました。

子どもたちが楽しそうに、そして真剣に問題に向かっている姿を見れて、私自身も頑張らないとと感化されました。

今日は、先生に助けていただいて、Kちゃんがほんの少しですが、安心してくれるきっかけを作っていただきました。今度は自分から、来てくれた子どもたちが質問しやすい雰囲気など、安心して学習に取り組める環境が作っていくことができたらと思います。また、Mちゃんとは話ができなかったので、次回はしっかり声が聞きたいです。

来週の木曜日もぜひ参加したいです！

○Y．Tくん

私はあづまも含めると３回目のボランティアでしたが、今回は初めての土湯温泉での活動だったので、子どもたちも内容もあづまとはまったく異なるものでした。

あづまでは小学生しかいませんでしたが、土湯温泉には中学１年生もいました。今回私は中学１年生と特に関わっていましたが、話は少し多いような気もしますが、どの子もある程度は自分の勉強を進められていたように感じました。

普段はどのくらいやっているのかはわかりませんが、徐々に時間をかけながら子どもたちがもっと落ち着いて勉強できるような環境にしていくことが必要だと思いました。

子どもたちはボランティアが次いつ来るのかを聞いていたので、子どもたちにとって勉強できる場所として認めてもらえたような気がしました。

（後略）